R7(2025)年 共通テスト本試
【文章Ⅱ】『源氏物語』現代語訳

【文章Ⅱ】光源氏（本文では「院」）は、病になり生死の境をさまよう妻を救おうとしている。その病には、かつての光源氏の恋人であり、今は亡き女性が関わっていた。

院も、「ただ、いまひとたび目を見あはせたまへ。
光源氏も、「どうか、もう一度、（私と）目を合わせなさってください。

いとあへなく限りなりつらむほどをだにえ見ずなり
ひどく あっけなく 臨終になってしまう 時をさえ、目を合わすことができずに

にけることの悔しく悲しきを」と思しまどへるさま、
終わってしまうことは、悔しく悲しいので」 と途方に暮れなさる様子が、（紫の上に先立た

とまりたまふべきにもあらぬを見たてまつる心地
れたら、この世に）留まりなさるはずもない様子であるのを 拝見する（周りの者たちの）気持ちは、

ども、ただ推しはかるべし。いみじき御心のうちを
容易く想像できるだろう。 甚だしい（妻への想いに溢れる）心の中を

仏も見たてまつりたまふにや、月ごろさらに
仏も 御覧になられるのだろうか、 数ヶ月間まったく

現れ出で来ぬもののけ、小さき童に移りて
現れ出なかった 物の怪が、 小さい童に 乗り移って

呼ばひののしるほどに、やうやう生き出でたまふに、
大声を出して叫び続けるうちに、 だんだんと（紫の上は）生き返りなさるので、

うれしくもゆゆしくも思し騒がる。
光源氏は嬉しくも 不吉にも思って 動揺なさる。

オンライン 東大合格 敬天塾

いみじく調（てう）ぜられて、
（物の怪である六条御息所は）祈祷によってすっかり（紫の上の身体から）退散されて、（童の身体で）

「人はみな去りね。院（ひと）一ところの御耳に聞こえむ。
「（光源氏以外の）人は皆去ってしまえ。光源氏お一人の　御耳に　申し上げよう。

おのれを、月ごろ、調じわびさせたまふが情なく
私を、　この数ヶ月、　調伏して苦しめなさるのが、　薄情で

つらければ、同じくは思し知らせむと思ひつれど、
つらいので、　同じことなら（この苦しみを紫の上に）に痛感なさるようにしようと思ったけれども、

さすがに命もたふまじく身をくだきて思しまどふ
そうはいっても（光源氏が）命も耐えられそうにないほど身を粉にして　途方に暮れていらっしゃるの

を見たてまつれば、今こそかくいみじき身を受け
を　拝見すると、　今でこそ、　このような酷い（もののけの）姿をしている

たれ、いにしへの心の残りてこそかくまでも
けれども、　昔の　恋心が　残っているからこそ、　こうまでして

参り来たるなれば、ものの心苦しさをえ見過ぐさ
参上したのだから、　（あなたの）気の毒そうな様子を　見捨てることができないで、

で、つひに現はれぬること。さらに知られじと
とうとう　姿を現わしてしまった次第です。『決して（正体を）知られるまい』と

思ひつるものを」とて、髪を振りかけて泣くけはひ、
思っていたのに」　と言って、　髪を　振り乱して　泣く様子は、

ただ、昔見たまひしもののけのさまと見えたり。
まさしく、以前にも御覧になった物の怪の　様子だと見えた。